

# 「深い深い雪の中で」(『あすなる物語』) 考

―井上靖の願望と悲哀―

高木伸幸

## はじめに

井上靖の『あすなる物語』は、昭和二十八年一月から同年六月まで『オール読物』に連載。翌二十九年四月、新潮社より刊行された。主人公梶鮎太の少年期から壮年期へ至る過程を「深い深い雪の中で」「寒月がかかれば」「漲ろう水の面より」「春の狐火」「勝敗」「星の植民地」の六章に分けて記している。各章は「翌檜（やぐら）の話」のイメージを受け継いで行く。全体で一つの長篇小説であるとともに、それぞれ独立した短篇としても成り立っている。梶鮎太の経歴には井上靖自身のそれが少なからず反映されている。しかし作者自ら「自伝小説」<sup>①</sup>と称する「しろばんば」(前編昭和三十七年十月・後編三十八年十一月、中央公論社(初出昭和三十五年一月・三十七年十二月)主婦の友)、『夏草冬濤』(昭和四十一年六月、新潮社(初出昭和三十九年九月二十七日・四十一年九月十三日)産経新聞)と比すれば、明らかな創作と認められる部分も多くフィクションの度合いは高い。

この『あすなる物語』は決して自伝小説ではないものの、自伝的な要素を含んだ作品、つまり作者の「根源的な姿」や「精神の発展史」がそこには描かれていると論じられてきた。また小説の主要モチーフについては、表題にも含まれた「翌檜の話」に注目した論者が多い<sup>②</sup>。「深い深い雪の中で」に描かれた「克己」を主要モチーフとする見解<sup>③</sup>も見られる。

これらはいずれも首肯できる部分があり、否定する必要はない。

しかし『あすなる物語』における「あすなろう」(「あすなろ」「克己」とは、それぞれ何を象徴しているのだろうか。そこには作者の如何なる「根源的な姿」「精神の発展史」が表れているのであろうか。具体的な考察はまだ為されていない。そもそも『あすなる物語』は、一つの長篇である以前に六つの短篇連作の趣があり、各章個別の考察が必要であらう。

本稿では『あすなる物語』論の第一歩として、冒頭に位置する「深い深い雪の中で」を対象を絞る。「あすな

ろう」「克己」の表現に留意しつつ、事実と小説の関係にも目配りし、井上靖がそこに如何なるモチーフを託したのか考察を進めたい。

一

梶鮎太は天城山麓の村で、祖母のおりようと土蔵で暮らしていた。鮎太が十三歳<sup>4</sup>、つまり小学校六年生になった春のこと、その二人だけの毎日の中に、十九歳のやや不良がかった少女、冴子が突然入り込んでくる。冴子はおりよう婆さんの姪<sup>5</sup>。女学校を停学になったらしく、おりよう婆さんのもとに身を寄せてきた。鮎太は冴子から温泉旅館に滞在している東京の大学生加島へ手紙を届けるよう頼まれる。鮎太はその際、加島から「克己」という言葉を教えられ、中学入学試験に向けた受験勉強に取り組み始める。鮎太は真剣に受験準備にヘビーをかけ、冴子も励ましてくれる。しかし十二月下旬<sup>6</sup>になったある日、冴子と加島は雪深い天城で心中してしまう。

以上のごとく、「深い深い雪の中で」は、祖母と生活していた鮎太が冴子と加島に出会い、受験勉強のことなど二人から影響を受けていく姿を主に描いている<sup>7</sup>。同時にその鮎太の眼を通して、冴子と加島の関係も少しずつ見えてくる。

鮎太が加島と冴子から如何なる影響を受けたのか確認

してみよう。

鮎太は先に触れた通り、加島から「克己」という言葉を教わる。加島は鮎太が中学受験を控えた小学六年生であることを知り、その言葉を伝えたのであった。「自分に克つて机に向かうんだな。入学試験ばかりではない。人間一生そうでなければいけない」とも話している。その際、鮎太は次のような感慨に耽っている。

（前略）何か知らないが生れて初めてのものが、自分の心に流れ込んで来たのを感じた。今まで夢にも考えたことのなかった明るいような、そのまた反対に暗いような、重いどろどろした流れのようなものが、心の全面に隙間なく非常に確実な速度と拡がり方で流れ込んで来るのを感じた。不思議な陶醉だった。

鮎太は「これほど魅力ある言葉にぶつかったことはなかった」とも考えている。

この時、鮎太の心に流れ込んで来たものは、これから歩んでいく道のり、時に明るく、時には暗い人生の漠然たるイメージであったと言えよう。鮎太は「克己」という言葉を通して中学受験に、そして自らの人生に、如何なる気持ちで向かっていくべきかを「生れて初めて」考えた。つまり加島によって人生への眼を開かれたのである。鮎太は翌日から「受験準備」を始めている。

冴子はそのような鮎太に対して、初めは「勉強なんて、

ふん、と言った顔をしていた」。しかし毎朝早起きをして受験勉強を続ける鮎太を見て、「何かと親身に鮎太の世話をやいてくれ」るようになった。ある晩、寢床の中で鮎太に次のように語りかける。

「早く眠んなさい。明朝早いでしょう。起きたら、直ぐ、お砂糖湯を飲むようにしておいて上げるわよ」

「本当の姉のように優しい口調」であり、「鮎太は生れてこれまで、これほど愛情深い労わりのある口調の言葉を耳にしたことはなかった」。

冬が訪れれば、凍えながらも机に向かう鮎太の手を冴子は自分の手で包んで温めてくれる。鮎太は冴子の手から伝わってくる「体温の温かみ」に「姉か母の持つに違いないそれと同じもの」を感じた。

ここで鮎太の生い立ちを確認しておきたい。鮎太は軍医である父が任地を転々としている故に、幼少時より父母から離れ、おりよう婆さんと二人で暮らしてきた。おりようは実は血縁関係のない戸籍上の祖母であったが、鮎太は実際の祖母と変わらぬ親しみを抱いていた。その一方で「離れている両親に対する思慕は少しも湧か」なかった。毎年夏休みだけ「都会の両親の許」で生活したが、そこは「固苦しい窮屈な場所であるに過ぎなかった」。

鮎太は父母と疎遠な関係にあり、両親の愛情を知らず、彼らが自分にとって如何なる存在であるか十分に理解で

きないままであったのである。おりようが保護者の役割を果たしていたが、それは孫に対する姿勢に近く、父母とはやはり異なる存在であったと言える。

そのような鮎太を冴子は「姉か母」のごとき温かい愛情で包んだ。対して加島は「克己」という人生に厳しく立ち向かう姿勢を示した。

すなわち鮎太にとって、加島と冴子の二人は本来父母が持つべき役割を代わって果たしてくれたのであった。冴子は〈母性〉を、加島は〈父性〉を、それぞれどのようなものであるか鮎太に初めて教えてくれたのである。天城山中で冴子と加島の遺体が見つかる物語の結末部に目を向けたい。鮎太の心境が以下のごとく記されている。

自分に克己ということを教えてくれた大学生の加島が誘ったか、冴子が誘ったか、勿論それは判らなかったが、自分に今までに一番大きいものを与えてくれた二人の人間が、同時に、同じ場所で死んでいることが、鮎太の心に悲しみよりもっと大きい得体の判らぬ衝撃を与えていた。二つの全く異質なものが、雪に包まれて、息をひそめている感じだった。

／気がつく、二人の死体の右手に、杉の木立に混じって、翌檜の老樹が一本だけ生えていた。(中略)／あすなろうの木の下で二人が横たわっているそのことに何の意味もあろう筈はなかったが、その

木の命名の哀れさと暗さには、加島の持つ何かが通じているように鮎太には思われた。／この二人の死を超えて行かねばならない。己れに克って人生を歩んで行かねばならない。中学に入って、沢山本を読まねばならない。そんないろんな昂ぶった感情が入り混じって、いつせいに鮎太の心から噴き出し、それが鮎太をそこに棒立ちにさせていた。／（中略）鮎太は現場に背を向けたが、その時初めて、鮎太は二人の死の持つ本当の意味が、その怖ろしさと悲しさが、突然大きい勢いで自分を押し包んで来るのを感じた。

ここに至って加島と冴子の関係が明らかにになる。加島は当初、鮎太が渡した冴子の手紙を破って捨てており、どちらかと言えば冴子を拒否していたように見える。しかし十月の村祭りの後、冴子は加島と二人で二泊の旅に出かけていたことも匂わされている。加島も本心では冴子に恋していたかもしれない。だが、当時エリートである「東京の大学生」の立場から、冴子を受け入れるのは難しかったのであろう。鮎太には二人のどちらが誘ったか不明と思わせているものの、冴子は以前、鮎太に雪深い山中での死を仄めかしていた。タイトル「深い深い雪の中で」もそこから採られている。冴子が誘い、やがて加島も承諾した心中だった可能性が高い。二人の関係は結びつくことが初めから困難であり、〈都会のエリート

青年〉を〈地方のやや不良がかった少女〉が押し切った悲劇だったかと推察される。

そのような冴子と加島が「翌檜の老樹」の下で眠っている。鮎太は「この二人の死を超え」「己れに克って人生を歩んで行こう」と考えている。

従って「深い深い雪の中で」においては、冴子と加島の関係に「あすなろう」のモチーフが、加島からその言葉を教わった鮎太に「克己」のモチーフが、それぞれ託されていると判断できる。

少し具体的に踏み込んでみたい。

「翌檜の木」は「あすは檜になろう、あすは檜になろうと一生懸命考え」ながら、「永久に檜にはなれない」故に「あすなろう」と命名された。冴子と加島のいわば悲恋は、その「あすなろう」が持つ哀れさに通じている。特に加島は「克己」という言葉を鮎太に教えた人物でありながら、自身は冴子を拒めず死を選んでいる。夢を叶えたくとも叶えられない悲しさ。その中で自分に敗れてしまう人間の哀れさ。いわば〈敗北感〉こそが二人に託された「あすなろう」のモチーフである。

一方、鮎太は加島と冴子の死によって、「あすなろう」の悲しさを知った。己れに克って人生を歩もうと考えたのは、自分は「あすなろう」になるまいという決意であり、それが鮎太の〈克己心〉だとひとまず解釈できる。その上で、さらに鮎太が二人から受けた影響をも考慮しなけ

ればならない。鮎太は〈父性〉、〈母性〉という「自分に今までに一番大きいものを与えてくれた二人」を同時に喪った。父母から離れていた鮎太は二人と出会って新たな肉親に近い存在を得た気持ちであつたろうが、そうした心の支えを再び失つたのである。鮎太が最後に感じた「二人の死の持つ本当の意味」、「その怖ろしさと悲しさ」とは、再び父性にも母性にも縁のないまま生きていく〈孤独感〉に他ならない。

すなわち自分は「あすなろう」になるまいと考えつつ、孤独感に負けずに受験勉強に取り組み、人生を歩んでいく決意表明。それこそが鮎太に託された「克己」のモチーフである。

## 二

「深い深い雪の中で」の登場人物をそれぞれ該当するモデルと比較してみたい。

まず作者自身を投影しているとおぼしき主人公鮎太について。

鮎太が生まれた梶家について、次のように説明している。

天城の南麓の小さい幾つかの部落では、梶家は昔から代々の医家を通っており、他の農家とは格式が違うものとされていた。十三代目が鮎太の父であり、

これも医者であつたが、彼は村では開業せずに、陸軍に仕官して、軍医としても何年も任地を転々としていた。

対して靖が生まれた井上家に目を向けると、同じく天城山麓の村において代々の医家を通っており、靖の父隼雄も医師であつた。隼雄が村で開業せず、陸軍軍医を務めたのも同様である。しかし井上家は天城でも「南麓」でなく、北麓に位置する湯ヶ島に存していた。また鮎太の父が「十三代目」と言うのも事実に基づいていない。靖の父隼雄は井上家において六代目の医師に該当している<sup>8)</sup>。梶家の設定は、井上家を概ね反映しながらもその細部が異なり、特に医家として実際以上に長い歴史を与えられている<sup>9)</sup>。鮎太が「梶の坊ちゃん」であることをより強調しているのである。

また鮎太は父が任地を転々としている関係で、父母と離れ、梶家の屋敷内にある土蔵で祖母おりようと生活している。おりようはもともと「梶家の人ではなく、梶家の先代の玄久の妾であつたが、それが玄久の死後、村の収入役と結託して、戸籍を書き替えて、玄久の後妻という形で梶家へ入り込んでしまった」。それだけによりうは村人から悪く言われていたが、鮎太はおりようから「可愛がられて育」ち、鮎太にとって「いい祖母以外の何ものでもなかった」。

井上靖も父隼雄が任地を転々としている関係で、父母

と離れ、井上家の屋敷内にある土蔵で祖母か、と生活していた。おかの婆さんはもともと井上家の人物でなく、靖の曾祖父潔の妾であった。それ故に村人から白い眼で見られていたが、靖は自分を可愛がつくれるおかの婆さんに懐いていた<sup>10</sup>。おりようと鮎太の設定は、この義祖母と井上靖に纏わる事実をほぼそのまま生かしたものである。

ただし、おかの婆さんが井上家の籍に入ってきた経緯はおりようと少し違っている。かのは「潔の晩年」<sup>11</sup>、潔の孫娘に当る八重（井上靖の母親）の義母という形で井上家の人物になった。それはかのの地位と生活の安定に配慮した、いわば「潔の計らい」<sup>12</sup>であった。

つまり、おりようは自ら強引に梶家に入ってきた人物に改められ、梶家や村人にとって、さらなる悪人として描かれているのである。

次いで鮎太に大きな影響を与えた二人、加島と冴子について。

加島から検討する。

井上靖は「小学校の五年生か六年生の頃」に「東京のどこかの大学を中退して、小学校に代用教員として勤めていた青年」から「克己という言葉」を教えられたと回想している。「人生に関する言葉を初めて囁かれた」思ひ出であり、「その言葉に少年ながら魅力を感じたに違いない」とも書いている<sup>13</sup>。この青年が加島のモデルと

見て間違いない。中島基なる人物が該当する。

中島基は湯ヶ島に近い伊豆中狩野村の医師中島賢の長男で、大正四年七月に国学院大学高等師範部国語漢文科を卒業し、大正五年一月より七月まで二松学舎大学にて漢文学を学んでいる。大正六年十一月より、井上靖が四年生として在学中であった湯ヶ島小学校に代用教員の立場で勤めている<sup>14</sup>。井上靖の回想に「東京のどこかの大学を中退」とあるのは、二松学舎大学で漢文を学んだ期間がわずか半年間であったことをそのように解釈した結果とも見られる。

井上靖は「その若い教師を大学生であったということだけで、何となく尊敬して」おり、その言葉を教えてくれたのは「私が目前に入学試験を控えて、いっこうに勉強している様子もなかったので、少し強い言葉で叱責したか、忠告してくれた」からであったとも綴っている<sup>15</sup>。そうした「若い教師」、つまり中島基への尊敬が、加島に対する鮎太の思いに表れているよう。鮎太は加島から「克己」という言葉を教わった後、冴子へ「僕は、あの人、好きだ」と話している。

ただし、加島は中島基と違って、鮎太が通う小学校の代用教員ではない。「時々村の禅寺へ遊びに行く東京の大学生」であり、「大変な勉強家だという噂だった」。中島基は井上靖にとって身近な存在でもあったが、加島はその空気を消し去り、より都会的かつ知的な人物に改め

られている。鮎太にとって大きな憧れの対象であることを強調しているのである。

一方の冴子。おりようのモデルおかの婆さんには、冴子のような姪は確認できない。創作された部分が大きい人物かと思われる。しかしその根底には井上靖の母方の叔母まちのイメージが存しているよう。

冴子が女学校に通っていたごとく、まちは沼津にある駿東高等女学校を卒業している<sup>16</sup>。加島のモデル中島基と恋愛関係に陥り、未婚のまま、二人の間に男児を儲けている。中島とまちが入籍したのは、それから一年以上後のことであった。さらにその入籍からわずか一年半後にまちは病死している<sup>17</sup>。井上靖は母から離れていた幼き頃、この母の妹であるまちに母性に似た思慕を抱いていたと明かしている<sup>18</sup>。

鮎太に「母か姉」を感じさせるような、冴子の鮎太に対する優しさは、まちが靖に向けた心情を反映しているのである。まちは女学校卒業後、湯ヶ島小学校の代用教員を務める<sup>19</sup>など、優等生の一面も持っていたようだ。だが中島基との婚前交渉による出産は当時、湯ヶ島の人々から「不良」と見做されたに違いない。冴子が女学校を停学させられるなど、やや不良がかった少女に造形されているのは、このまちに対する評判を拡大、誇張した設定であろう。冴子と加島の心中に終わる二人の悲恋は、当時としては白眼視されたまちと中島基の恋愛関係

に、まちの早世という不幸を重ねて創り出されているのである。

### 三

井上靖は「深い深い雪の中で」を含めた『あすなろ物語』全体の創作方法について次のように書いている<sup>20</sup>。

六つの挿話とも、その舞台や環境は私自身のものを使っており、到るところに自分の経験したことも取り入れてあるが、物語は完全なフィクションである。従って、形は何となく自伝小説風であるが、自伝小説とは言えない。事実と虚構がふんだんに入り混じっている。(中略)／それではこの六つの挿話の中に居る主人公はあなたではありませんねと聞き直して訊かれると、そうです、私ではありません、しかし、私以上に私かも知れませんがとも答える以外仕方ないような気がする。ここには、私自身より、もっと私に似た私が書かれているかも知れない。

ここで井上靖は偽りなく率直に告白していると言えよう。「深い深い雪の中で」においては、作者自身と周辺の人々に関わる「事実」が鮎太と主要な登場人物の造形に確かに活かされている。その一方で、鮎太は「梶の坊ちゃん」、おりよう婆さんは悪人、加島は都会の学生、冴子は不良として、それぞれモデルとは異なる形に「虚

構」されている。何より加島と冴子の恋愛は、結婚に至らず、女性の病死でもなく、事実から大きく離れた心中という悲劇で終わっているのである。

そうした中で、主人公鮎太の人物像を「私以上に私」「私自身より、もっと私に似た私」だと言い表していることに注目したい。

右のとき創作は、いずれも読者にわかりやすく、劇的な方向へ物語を導くそれと言える。おりようも、加島も、冴子も、それぞれモデルより、良くも悪くも、読者を惹きつけやすい人物に造形されている。従って「私以上に私」「私自身より、もっと私に似た私」とは、梶鮎太が実際の井上靖以上に、読者を楽しませる主人公として表されていることをまずは意味しよう。「深い深い雪の中で」は『あすなろ物語』の第一章であり、井上靖のストーリー・テリングの手腕が大いに發揮され、エンターテインメント性を重視した作風に仕上げられているのである。

しかし、ただなるエンターテインメントとして片付けるのは適切であるまい。読者を楽しませる創作であっても、作者自身の喜怒哀楽と決して無関係ではない。見方を変えれば、梶鮎太像には〈そのようにありたかった私〉あるいは〈辛く悲しかった私〉、つまり過去を振り返って抱いた井上靖の願望や悲哀が、事実を変形して託されているのではないか。

ここに来て冴子が何故、おりようの姪であるのか、その理由が見えてきたと言える。

父母に代わって幼少時代の靖を育てた義祖母かの。母性を感じさせたまち。幼き頃に実の両親に代わる思慕の対象であった二人を井上靖は結び付けたく、おりようと冴子を伯母と姪という肉親の關係として描いたのである。「鮎太と祖母りようの二人だけの土蔵の中の生活に、冴子という十九歳の少女が突然やって来て、同居するようになった」。この「深い深い雪の中で」の書き出しには、おかの婆さんとともに、まちも土蔵で同居し、一緒に生活したかった<sup>21</sup>井上靖の深層心理が表れているのである。

そして鮎太に〈父性〉、〈母性〉を与えた加島と冴子。井上靖はその二人を最後に心中させた。幼少年時代、父母と離れ、父性、母性を欲していた井上靖自身の〈孤獨感〉が、またそれに負けまいとする〈克己心〉が、ここに劇的に演出されているのである。

## おわりに

「深い深い雪の中で」は、作者自身の少年時代を素材にしながらも、より劇的な形へと事実を改変して作られた「物語」である。「あすなろう」のモチーフを加島と冴子に託し、〈敗北感〉として表している。鮎太には「克

己」のモチーフを託し、〈孤独感〉に負けずに人生を歩む決意表明として表現している。これまで『あすなる物語』に描かれていると言われてきた井上靖の「根源的な姿」「精神の発展史」とは、かくなるモチーフから垣間見える作者の願望と悲哀に他ならない。「深い深い雪の中で」には、井上靖文学の源を読み解く貴重な手掛かりが示されているのである。

## 注

(1) 「自作解題」(『井上靖小説全集第二十五巻 しろばんば・月の光』昭和四十八年三月、新潮社)、「自作解題」(『井上靖小説全集第二十六巻 夏草冬漣』昭和四十八年五月、新潮社)参照。

(2) 「あすなる物語」について、例えば内海伸平(小松伸六)は「普通の年代記や回想的な作品でなく、「二個独立したロマン」だと指摘し、「あすなる」という「自己の根源的な姿」を「ロマンに仮託しながら、さがしている」小説だと論じている(『作家以前の井上靖―『あすなる物語』について―』、昭和三十一年十一月『赤門文学』)。福田宏年は「伝記資料としてこの小説に拠ることはできないが、井上靖の精神の発展史として見た場合、示唆を受ける点が多々ある」と書く。そして「あすなる」とは作者の

「劣等感情の象徴」だと考察している(『井上靖の世界』昭和四十七年九月、講談社)。

(3) 田村嘉勝は「あすなる」にこだわり過ぎるのでなく、「深い深い雪の中で」に注目し、むしろ「克己」を主要モチーフとして読み取るべきだと主張している(初出昭和五十五年十月『言文』、『井上靖―人と文学』(平成十九年六月、勉誠出版)収録)。

(4) 作中の年齢は数え年で記されている。冴子の年齢も同様である。

(5) 冴子はおりの妹の一人娘に設定されている。おりようは冴子の伯母、冴子はおりようの姪に当たる。

(6) 冴子が鮎太の手を自分の手で温かく温めてくれたのは「十二月中旬」。その「一週間」後に冴子と加島の心中事件は起こっている。

(7) 「深い深い雪の中で」には、加島の妹も登場する。鮎太より「一つか二つ年下」に設定されたこの少女は、次章の「寒月がかかれば」で浜子という名前を明かしつつ鮎太と再会し、鮎太の記者時代を描いた「勝敗」にも顔を見せている。『あすなる物語』全体を通して考察すべき人物と言える。しかし「深い深い雪の中で」においては、鮎太に「いかにも都会の少女しか持っていない伶俐さ」を感じさせる程度で、物語に仄かなロマンの香りを加味する役割に留まっ

ている。

- (8) 藤澤全『若き日の井上靖研究』(平成五年十二月、三省堂) 参照。

- (9) 靖の父隼雄は井上家に養子で入った人物であった。隼雄の兄盛雄は生家石渡家十二代目に当たり、仮にこの盛雄の後、隼雄が石渡家を継いでいれば「十三代目」となった。作中の設定は、あるいはこの事実を当てはめたものかとも推察される。藤澤全『若き日の井上靖研究』(注(8) 前出) 参照。

- (10) 「私の自己形成史」(昭和三十五年五月～十一月『日本』、「幼き日のこと」(昭和四十七年九月十一日～四十八年一月三十一日『毎日新聞(夕刊)』)、『過ぎ去りし日日』(昭和五十二年六月、日本経済新聞社〈初出昭和五十二年一月一・三日～三十一日『日本経済新聞』) 参照。

- (11) 『過ぎ去りし日日』(注(10) 前出) 参照。

- (12) 「私の自己形成史」(注(10) 前出) 参照。

- (13) 「わが一期一会」(昭和四十九年五月五日～五十年一月二十六日『毎日新聞』) 参照。

- (14) 安藤裕夫『「しろばんば」の教師たち』(平成三年八月『天城湯ヶ島町ふるさと叢書第一集』)、藤澤全『若き日の井上靖研究』(注(8) 前出) 参照。

- (15) 注(12) に同じ。

- (16) まちの年齢は井上靖より十二歳上で、鮎太より六

歳上に設定された冴子に比してやや年長であった。

- (17) 藤澤全『若き日の井上靖研究』(注(8) 前出) 参照。  
(18) 「私の自己形成史」(注(12) 前出)、「幼き日のこと」(注(10) 前出) 参照。

- (19) 藤澤全『若き日の井上靖研究』(注(8) 前出) 参照。  
(20) 「『あすなる物語』について」(『井上靖小説全集第六巻あすなる物語・緑の仲間』昭和四十七年十一月、新潮社)

- (21) おかの婆さんと靖が暮らしていた土蔵は、曾祖父・井上潔が診療所兼住居として建てた屋敷内にあった。叔母まちは、そこから大人の脚で五分程度の距離にある井上本家(母方の祖父母宅)で生活していた。「幼き日のこと」(注(10) 前出) 参照。

## 〔付記〕

井上靖の作品引用は、全て『井上靖全集』全二十八巻別巻一(平成七年四月～十二年四月、新潮社)に拠る。傍点は私に付した。